頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム
ハワイ出張報告（平成 24 年 3 月 3 日～3 月 7 日）

出 張 者：水野一晴（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授）
出張期間：2012 年 3 月 3 日～7 日
出 張 先：ハワイ大学
出張報告：

ハワイ大学 Manoa キャンパスを訪問し、「頭脳循環」事業を含め、今後の学術交流および教育研究に関する相談を、言語学学科の Ken Rehg 教授（Chair, Department of Linguistics、University of Hawai'i at Manoa）と行った。Ken Rehg 教授は今後の学生受け入れや教育協力に快く応じてくださった。

現地では、頭脳循環で派遣されている紺屋あかりさんと会い、彼女の 12 月からのハワイ大学留学について情報交換を行った。また、彼女の受け入れ予定の教員である社会学科の人類学専攻（College of Social Sciences，Department of Antropology）の Christine Yano 教授には日程が合わず、話し合いの場をもつことはできなかった。

ホノルルのビショップ博物館を訪れ、ハワイの歴史や文化、自然、社会について貴重な情報を収集することができた。紺屋さんには太平洋にあるホットスポットとプレートの移動から、火山活動とハワイの各島の地質学的成り立ちについて指導した。そこでは、植物図鑑や地図、言語集等を購入した。紺屋さんとはダイヤモンドヘッドにも登り、その自然について説明した。火山の溶岩からなる斜面には土壌層があまり発達しておらず、イネ科草本が叢生するなかマメ科の低木が侵入しつつある状態であった。

また、彼女とともにポリネシア・カルチャー・センターを訪れた。ポリネシアの島ごと、民族ごとに伝統や文化が異なることがわかったが、それ以上に共通性が見られることには驚かされた。タヒチやサモア、フィージー、トンガ、ニュージーランド島、ハワイと距離的には遠く離れていても、古くからカヌーやボートで人々は移動し、その結果、太平洋に散らばる島々の言葉や踊りに多くの共通性を見ることができた。

ポリネシアの言葉の共通性は以下のようである。

	ハワイ語	タヒチ語	マオリ語
鳥	manu	manu	manu
カヌー	wa ʻa	va ʻa	waka
子供	kamali ʻi	tamari ʻi	tamaiti
飲む	inu	inu	inu
顔	maka	mata	mata
魚	i ʻa	i ʻa	ika
飛ぶ	lele	rere	rere
手	lima	rima	ringa
頭	po ʻo	ūpo ʻo	ūpoko
家	hale	fare	whare
月	malama	marama	marama
夜	pō	pō	pō
人	kanaka	ta'ata	tangata
力	mana	mana	mana
雨	ua	ua	ua
海	moana	moana	moana
病気	ma ʻi	ma ʻi	maki
皮	ʻili	ʻiri	kiri
空	lani	ra ʻi	rangi
歯	niho	niho	niho
亀	honu	honu	honu
何？	aha	aha	aha
女	wahine	vahine	wahine

表１　ポリネシア系言語の比較

（『ハワイ語のすべて』（Albert J. Schütz 著, 2011 年, Island Heritage Publishing, Hawai）より引用）

写真 1　ホノルルのビショップ博物館

写真２　オアフ島のダイアモンドヘッドのクレーター内の斜面

写真３　溶岩上には土壌があまり発達しておらず、イネ科の草本が叢生する中、マメ科の樹木の稚樹が生育している。

写真４　マメ科のアカシアの一種の稚樹

写真 5　かつて太平洋を移動していた帆船

写真 6　かつて太平洋を移動していた大型カヌー